

鼎談

女性リーダーが語る慢性期医療の未来

- ◆日 時：10月20日（金） 8:30 ～ 9:40
- ◆座 長：橋本 康子 日本慢性期医療協会 会長
- ◆演 者：橋本 康子 千里リハビリテーション病院 理事長
天野 純子 医療法人ハートフル 理事長
室谷ゆかり 医療法人社団アルペン会 理事長

鼎談 略歴

座長・演者

橋本 康子（はしもと やすこ）

日本慢性期医療協会 会長
医療法人社団和風会 理事長
社会福祉法人徳樹会 理事長
社会福祉法人福寿会 理事長
医学博士

■ 略歴 ■

名古屋保健衛生大学（現 藤田医科大学）医学部 卒業
香川医科大学（現 香川大学医学部）第1内科教室 入局
米国インディアナ大学腫瘍学研究所 勤務
医療法人社団和風会 橋本病院 勤務
医療法人社団和風会 理事長 就任
医療法人社団和風会 千里リハビリテーション病院 開設
医療法人社団和風会 千里リハビリテーションクリニック東京 開設

日本慢性期医療協会 会長
慢性期リハビリテーション協会 会長
全国抑制廃止研究会 幹事
香川県抑制廃止研究会 会長
香川県女医会 会長
厚生労働省 社会保障審議会 介護保険部会 委員
厚生労働省 社会保障審議会 介護保険部会 介護分野の文書にかかる負担軽減に関する専門委員会 委員
日本地域医療学会 理事
新型コロナウイルス感染症対応人材ネットワーク運営委員会 委員
病院薬剤師を活用した医師の働き方改革推進事業 協議会委員
日本地域包括ケア学会 理事
在宅医療政治連盟 顧問

演者

天野 純子（あまの じゅんこ）

医療法人ハートフル 理事長

■ 略歴 ■

東海大学医学部卒。1987年広島大学医学部附属病院（第1外科）入局。1993年アマノ病院（現 アマノリハビリテーション病院）開設・院長就任。1996年医療法人フェニックス（現 ハートフル）設立・理事長就任。

日本医師会産業医、義肢装具等適合判定医師、日本リハビリテーション医学会認定医・専門医・指導医、日本病院総合診療医学会総合診療医、総合診療専門医特任指導医

室谷 ゆかり (むろたに ゆかり)
医療法人社団アルペン会 理事長

■ 略歴 ■

1996年	日本大学医学部卒
1997～2001年	東京都老人医療センター（現：健康長寿医療センター）研修
2001～2004年	つくしんぼ大山診療所（在宅療養支援診療所）勤務
2004～2006年	初台リハビリテーション病院勤務
2006～2008年	室谷病院勤務
2008年	アルペンリハビリテーション病院院長就任
2013年	現職

鼎談

女性リーダーが語る慢性期医療の未来

千里リハビリテーション病院 理事長
橋本 康子

2000年の介護保険導入以来、65歳以上の高齢者の増加率より要介護者などの寝たきり老人の増加率の方が上回っている。一方で、就労人口の急減も同時に進行するため、要介護者を担う医療介護従事者が減少することにもなる。慢性期医療を含めた医療、介護業界は、これらの両面から大きな転換期を迎えている。私たち慢性期医療の提供者もこれまでと同じままではいけないのである。

当協会の会員は、経営に自由度のある民間病院等で構成されている。診療報酬などの制度面に影響を受けることはあるが、民間ならではの発想や手法でこの転換期を迎え打たなければならない。慢性期医療だからといって、性別に関係することはないかもしれないが、病院施設のリーダーが、今後の慢性期医療についてどのように考え、行動していくかについては、学ぶところが多いと思う。

私からは、医療法人社団和風会の理事長として、「気づきの医療」という理念から、橋本病院、千里リハビリテーション病院、千里リハビリテーションクリニック東京と、どのような病院作りを行ってきたかを紹介したい。その後、お二人の先生の考えを伺い、会場の皆さんと一緒に慢性期医療にはどのような未来が描けるのか、ぜひ建設的な意見交換を実施したいと考えている。

鼎談

慢性期医療の在り方について考える ～ある女性の症例報告を通して～

医療法人ハートフル 理事長
天野 純子

日本の平均寿命は男女ともに80代を超えた。近隣の国々、中国では男性75.5歳、女性は81.5歳（2020年）韓国では男性77.0歳、女性は83.8歳（2010年）と高齢化が進んでいる。世界的にも高齢化が進行しているといえよう。この超高齢化社会の中で、私たちはどのように生きていくべきなのであろうか。たとえ高齢となっても、住み慣れた場所で、自分が「生きていてよかった！」と思えるような人生を送りたいと思う。

私たちの法人は、リハビリテーション医療・ケアを提供しているが、法人のミッションとして、「関わる人たちが住み慣れた場所で、自分らしい人生が送れるように支援する」としている。リハビリテーション、特に地域リハビリテーションが慢性期の医療として重要であると考えている。

地域リハビリテーションとは、以下のように定義されている。

「障害のある子どもや成人・高齢者とその家族が、住み慣れたところで、一生安全に、その人らしくいきいきとした生活ができるよう、保険・医療・福祉・介護および地域住民を含め生活にかかわるあらゆる人々や機関・組織がリハビリテーションの立場から協力をし合って行う活動のすべてを言う。」（日本リハビリテーション病院施設協会）

「リハビリテーションの立場から」とあるが、リハビリテーションとはどのように定義されているのであろうか。WHO（世界保健機構）によれば、「能力低下や社会的不利を改善し、障がい者の社会的統合を達成するための、あらゆる手段を含む」とある。

「そのひとらしくいきいきとした生活を送る」ためには、「そのひとの持つ能力の低下や社会的不利をできる限り改善する必要がある」と言える。

近年、機能や能力の障害に対するアプローチには目覚ましいものがあると実感する。ICTやAi、VRをはじめ様々なテクノロジー、低侵襲でミニマムの手術や痙縮の治療などである。

今回、私が世界で最も尊敬する医師であり、私の母親でもあるひとりの女性の経験を紹介したいと思う。彼女は変性側弯を発症し、腰椎の根症状を併発した。腰痛と下肢痛のため、歩行もままならなくなり、彼女が生涯継続したいと望んでいた診療が困難となっていた。彼女はPIPI（Percutaneous transpedicular Intervertebral vacuum PMMA Injection）という治療を受けることを望み、その手術を受けた。その結果、彼女の症状は改善し、リハビリテーションによって筋力も回復。彼女は診療に復帰し、本年6月3日に急逝するまで診療を続けることができた。まさに彼女が望んでいた通り、生涯現役を貫いた。最高の人生であったのではないだろうか。それはまさに私が理想とする慢性期医療の在り方であると思う。彼女を症例として提示し、PIPIという治療を紹介し、慢性期医療の在り方について話をしていきたいと思う。

鼎談

時代に負けず、仲間と共に

医療法人社団アルペン会 理事長
室谷 ゆかり

長年保育の現場に携わった方から、「子育てにおいて、女の子は母性があり、年々強くなるから放っても大丈夫。男の子は正義のヒーローが好きな、不純なことを考える宇宙人だから、試練が必要。」と言われたことがある。本来、事業を行うことは、女性なのか、男性なのかというジェンダーの問題はないはずだが、大きな夢を描いて突き進んでいかれる男性経営者がおられる一方、医療や福祉における女性経営者は、自分が困った人や事柄に出会ったのを起点に、『もし自分なら』の視点で、現実的で母性ある運営を目指している感じがする。

私たち法人は、祖父が町医者→長期療養増加で老人病院開設→介護の必要増加で特別養護老人ホーム(特養)・軽費老人ホーム開設→個別ケアを求めユニットケア特養・認知症対応型通所介護・事業所内託児所増築→自己選択・自己決定の夢のみずうみ村式デイサービス開始→老人病院を回復期リハビリテーション病院に転換・新築移転→お互いを知り合う多世代支援施設(介護・保育・障害)開設→障害のあるお子さんや中途障害の方が働く練習ができる障害就労支援施設開設と、迫られた生活課題に対し、場作りを進めてきた。

しかし、身体拘束なしでアクシデントを防ぐため、夜勤帯に回りハ病棟の全室個室の長い動線を走ってくれていたスタッフが、「先生、私も頑張るけど、持たんかもしれん」とポツリと言ったとき、本当に申し訳なくなった。転倒時の衝撃を抑えるジョイントマットを居室に敷き詰め、眠りを把握するセンサーも全室に入れた。ようやく夜勤の負担を減らせてきたと思った頃、コロナウィルスクラスターが発生。感染対策に追われる間に、静かにスタッフ不足が進行し、徐々にケアやそこにあるはずの思いも弱まったことに気づけなかった。

スタッフ不足で夜勤が動かなくなる寸前まで来て、外国人スタッフの応援を求めることとなった。なんとか半年でインドネシアの看護大学卒の学生さん方が来てくれた。だが今度は勤務シフトがギリギリで夜勤専従を置くくらいだったので、教育にどう人を割くかが課題となった。介護スタッフの提案で新たな育成の仕方を試み、4ヶ月で夜勤が可能となって、夜勤専従も終了の目途がついた。加えて、腰痛のスタッフが増えていたこともあり、小柄なインドネシアスタッフの身体負担を考え、リハの努力で、入浴や移乗にリフトやスライディングボード・シートを導入し、使いにくさも分析できた。

本来おめでたいはずのスタッフの結婚や妊娠にもドキッとするのはおかしい。

今後目指すところは、再びいいケアを取り戻すこと。人がいないことで、お互いの思いやりがなくならないよう、様々なトライアルを行い、対策を速やかに汎化していきたい。女性は生理や出産など、理不尽な痛みを受け入れるためか、理不尽さに耐性があり、守るべきものがあるとしぶとく引かない。この時代の理不尽さに負けず、仲間と共に大切なものを守っていかれたらと思う。